

---

## 《論 文》

### 想起を支える集団の形成と維持

#### The generation and maintenance of the group that supports the activity of remembering

森 直 久

---

1980年前後から、日常場面における記憶現象を探究する気運が高まり現在に至っている（たとえば、Gruneberg, Morris, & Sykes, 1978, 1988; Neisser, 1982; Neisser & Winograd, 1988）。その運動の一部には、記憶を過去を語る行為として、すなわち想起として再考しようとする動きがあった。その後の研究において、想起を再活性した記憶痕跡の表出としてではなく、社会的・対人的要請を満たす社会的技能として再概念化する動きが活発となっている（たとえば、Edwards & Middleton, 1986, 1987; Edwards & Potter, 1992; Middleton & Edwards, 1990）。

想起を社会的技能として考える場合、その技能を支えている社会的基盤を踏まえて研究は遂行される必要がある。どのような場合に、どのような想起を行なうことが適切であるのかを評価判断し、想起の適切な遂行を誘導する社会的基盤をである。このような社会的基盤については、アルヴァックスの古典的研究（アルヴァックス, 1950）が示唆的である。アルヴァックスは、ある過去の出来事や思い出が反復して想起され、存続する社会的基盤として、「集団」あるいは「社会的枠」という概念を提供した。類似の発想に基づくより最近の実証研究としては、家族集団の凝集を志向した想起技法が、母子間で伝授される様を追った Edwards & Middleton (1988) や、想起によって職業集団の成員であることを成員たちが確認し合う様を描出した Orr (1990) を挙げることができる。

想起の社会的基盤に言及し、想起と集団との力動的関係に接近しようとした点で、これらの研究は重要である。しかしこれらの研究は、研究すべき集団の存在を自明なものとして議論を始めているように思われる。集団とそこに属する成員が前もって決定可能であるとの前提に立って、人々の想起が研究されているのである。先に挙げた先行研究が対象とした宗教集団、職業集団、家族集団などは制度的に確立された集団であるため、集団の存在は明瞭であり、ある人間がその集団に属しているか、その集団がどのようなものなのかを事前に決定可能であると考えても支障はなかったと思われる。しかしながら日常に目を転じてみると、たとえば仲間集団など、制度化されていないため、集団の境界や特質が不明瞭な集団の方が一般的であるように思われる。このような集団内で遂行されている想起を問う場合、まず集団の存在を確認し、同定する作業が必要である。

「集団」を同定する作業を開始する際、社会心理学における集団研究との接点を問われよう。なぜそこに、人々の単なる集合体ではなく、凝集性を有した集団を認めることができるのか。いくつかの研究に、本研究が提起するこの問いに対するヒントを見い出すことができる。これらの研究では、成員相互の言動に、凝集性を有した集団の根拠を見ようとしている。たとえば Owen (1985) は、討議集団の会話を分析することによって、集団の凝集性を成員による共通の隠喩の使用に見い出そうとした。Eder (1988) は、女子中学生の昼食時の会話を観察する中に、互いの結束を緊密にするいくつかの会話方略を見い出している。Sherif (1967) は、集団への所属意識を、集団内でのみ通用する言葉や冗談、チーム名やチームの旗の使用といった所作に見い出している。しかしながらこれらの研究では、やはり集団の存在を前提として、凝集性が論じられている。つまり、ある集団が存在しているが、その集団を特徴づけるどのような特質が成員間のやり取りのなかに見い出されるかという問題意識なのである。隠喩、会話方略、その他表象の使用によって、集団の存在がどのように浮き彫りになるのかという視点を、本研究とは共有していない。

理論的考察としては、ホッグ (1987, 1992) の社会的アイデンティティ理論を参照することができる。内集団メンバーとの同一化と外集団メンバーとの差別化が、カテゴリー化という方法により成員自らによって達成されると主張するこの理論は、本研究と基本姿勢を共有している。この理論的姿勢に忠実であろうとすれば、アイデンティティの表示や自己のカテゴリー化がどのように達成されているのかを、具体的なコミュニケーション事態で確認する必要がある。しかしホッグは、このような会話に着目する方法に対して懐疑的である。会話（ホッグは「談話」(discourse) を使用している）に焦点化することは、「認知を否定することで、社会的行動に介在する構成概念の存在をも否定していると思われる」（ホッグ, 1987 邦約 P.78）と彼は言う。またこのようにも言う。「どのような心理学の理論も心理内部の認知過程を扱わねばならない」（ホッグ, 1987 邦約 P.160）。認知や構成概念を個人内に想定し、それを言動の原因と考えることは可能である。しかし彼のような主張に対しては、次のような反論が可能である。第一に、自らの言動の起源としての認知（あるいは個人内の構成概念）を、成員は常に意識しているわけではないということ。ただそのように語り、行動しているだけのことが多い。認知はそのような観察可能な言動から推測されるだけである。明確に語れるほどの認知を所有しているとしたら、それは言動の中に観察可能であると思われる。そして第二に、集団研究が個人単体ではなく、成員同士が相互交渉する集団を対象とするのであれば、他の成員から観察可能な認知、および構成概念を主として扱う必要がある。そのような認知、構成概念でなければ、集団内の他の成員に対する影響は皆無であろうからである。結論を言えば、言動の原因としての認知は想定可能であるが、集団そのものを研究対象とする限り、想定することの意義が薄いのである。ホッグ (1987) がそうしているように、会話への注目を行動主義への回帰であるかのように語り、個人内の認知機構を強調することは、不可避免的に集団の社会心理学を個人

の認知心理学へと還元する道を敷くことになる。彼の理念は、集団の個人への還元に抵抗し、集団をその独自のレベルで研究することであったはずだが、心理学としてのアイデンティティを強調するあまりであろうか、個人内の機構の研究へと回帰する傾向が彼の発言のなかには読み取れる。

ホッグ (1987) では徹底されなかった、会話を手がかりに凝集性を見い出そうとする試みとしても、本研究は位置付けられるかもしれない。以下では、想起を社会的技能として研究する際に必要とされる、想起の社会的基盤である集団が可視化している様をとらえる方法を提案することが、第一の課題として取り上げられる。そして第二の課題として、具体的なフィールドに降り立ち、集団がどのように可視化し、また維持されているかを描出する。

### 集団の描出

集団は、凝集性を持った統一体として認識される必要がある。集団の存在は、どのように把握されるべきなのか。集団は複数の人間からなるが、人の単なる集合体と区別されねばならず、また成員の欠損や交代にかかわらず集団が存続することを考えると、物理的外見のみから集団を確定することは不十分である。そうすると、凝集性を支える規範的なものの存在に訴えることが有用だが、規範には変容の余地を許さねばならない。規範が変わっても、集団が存続することはあり得るからである。よって、規範の変容の可能性を含んだ確定法をとる必要がある。これらの条件を満たすような集団の同定を可能にする方途として、本研究は人々の身体的・言語的实践に注目する。それら実践を通じて、人々は、凝集性を持った統一体として自らを可視化させている。すなわちそのような実践は、エスノメソドロジーで言われる「人々の方法 (ethnomethod)」なのである (ライター, 1980; 山田・好井, 1991)。本研究では、実践とそれ以外の言動を、そのコミュニケーション的性格の有無によって分けたいと思う。ある言動にメッセージを認めるかどうかは、産出者の意図に関係なく、基本的に受け手に委ねられている。例えば、偶然店の前に立っていた人に「並んで順番を待っている」というメッセージを読み取って、行列が形成されることが考えられよう。したがって本研究においてコミュニケーション事態は、次のように定義される。ある個人から産出されたある言動に隣接して、別の言動が後続した場合。そして後者が前者に対して無関係ではないことが、さらに後続する産出した本人あるいは聴衆の言動によって認められた場合、そこにコミュニケーション事態が成立している、と。このようなコミュニケーション的連鎖の中にある言動を、実践と呼ぶことにする。先の定義からして、実践は共同的で、集合的である。この共同性や集合性を支えているものとして、集団が想定される。本研究では、言語を用いる言語的实践と、身体的所作による身体的実践の二種類の実践に注目する。

コミュニケーションとしての実践から集団を同定する試みは、集団を確定する際の先述の条件を満たしている。実践が再生産される限りにおいて、成員の欠損や交代は集団の存続に影響

しない。一方実践は規範に適いつつも、規範を変容させる可能性を内包している。なぜなら先に定義したコミュニケーション事態においては、ある言動には一定の解釈が期待されつつも、多義的な解釈の余地もまた残されているからである。そしてその解釈は、集団成員間の循環的なコミュニケーションによって集団全体へと伝播するだろう。解釈の多義性と循環的コミュニケーションによって、凝集性を維持しつつ実践の新たな解釈や規範の改変の生じる可能性が保証される。

集団研究の多くが、集団内と集団間のコミュニケーションの内実の違いを実証している（レビューとして Brewer & Kramer (1985), 境 (1990) を参照）。それらの研究では、集団の境界は実験者によって操作されるなどして事前に決定されているが、日常における制度化されていない事態では、コミュニケーションの内実の違いによって、逆に集団の境界が可視化すると言える。集団の確定は、外部と内部を差別化するような実践の描出によっても可能となろう。

続いて以上の論考を、実際のフィールドに適用してみよう。

## 集団を可視化させている成員の実践

### データ採取

#### 1. 対象としたフィールド

データが採取されたのは、東京都内のある居酒屋である。ここにはプロレスファンが頻繁に訪れる。いわゆる、たまり場である。ここでは、ほぼ月一回休店日に、ビデオ上映会が行なわれている。終了後参加者たちは、近くの居酒屋で談笑するのを通例としている。上映会、談笑会への参加に制限はなく、開催中に来店すれば誰でも参加できる。この月例会には明確な目的や制度、あるいは会を統括するリーダーはなく、その意味で制度化されていない状況と言える。この上映会と談笑会を、およそ半年にわたり計4回調査した。

#### 2. データ採取の方法と量

上映会と談笑会に参加しつつ、観察、記録を行なった。すなわち、本研究が採用する方法は、参与観察法である。上映会では、席の占め方が記録された。談笑会ではそれに加えて、参加者の会話がテープ録音された。録音は、着席からお開きになり全員が退席するまで行なわれた。テープや電池の交換の時以外、会話はすべて録音されている。録音以外の記録は、談笑会中素早くテーブルの下で行なわれるか、談笑会終了後に行なわれた。かくして、観察者が費やすほとんどの時間は、談笑への参加であった。記録された談笑会の会話は、1回につきおよそ3時間。4回の合計は10時間超であった。

#### 3. データ加工の方法

会話は、逐語的に文字に起こされた。音声の持つどのような情報を転記すべきかは、それだ

けで独立した問題となり得るが、本研究では後の考察に関連する情報のみをテキスト上に反映させた。Table 1 は、本研究が採用した音声情報とそのテキスト上での表記である。

Table 1 音声情報とそのテキスト上での表記

記号	用 法
/	発話の中の短い休止 (0.5から1秒程度)
(間)	「/」以上の休止
↑	ある発話の途中で、他者が発話を開始した時点。
=	この記号が最初に付いた行の発話に対して、同記号が付いた以後の発話が向けられていることを示す。
?	語尾が上昇イントネーションで、文脈から判断して疑問文であることが明白な表示
(笑)	笑い声
...	聞き取り不能箇所
、。	句読点は、表記上のわかりやすさのために用いた。
X	話者の同定が不可能だった場合の表記

#### 4. 分析を加える部分

本研究の関心は、想起活動にある。よって、分析の対象となるデータは、過去に言及された発話である。会の性格上、参加者たちを大きく方向づけるトピックはプロレスになることが期待され、事実その通りになった。プロレスをめぐる想起に焦点を当て、その活動の基盤となっている集団を描出して行くことが、本研究の関心にしがった最も有効なデータ活用となろう。

また今回の分析および考察は、第一回と第三回の談笑会からのデータに、結果的に限定されることとなった。この理由については、後の考察で触れたいと思う。

### 結果と考察

参加者たちの身体的・言語的諸実践によって、参加者の集合体には集団が可視化していた。集団を可視化させていた諸実践は、集団間の境界形成と境界の維持の二つに類別できるように思われた。前者は集団の内外を差別化する実践、後者は外部と差別化された内部の安定を志向する実践である。その現実の姿を追ってみよう。

#### A. 実践による境界形成としての集団の可視化

##### 1. 席の占め方

談笑会に先立って行なわれるビデオ上映会の席割りには、大きく二つの部分に分かれている。カウンター席とテーブル席である。テーブル席は移動可能な小テーブルをつなげたもので、この上には投影装置も乗せられる (店内のレイアウトについては Fig 1 を参照)。上映会における参加者の席の占め方には、一般的傾向が見て取れる。来店回数の多い者はテーブル席を囲んで座り、来店回数の少ない者、及び初めての者はカウンター席に座る傾向がある。談笑会での

席の占め方は、上映会での着席の片寄りと相関を持っていた。談笑会の第一回と第三回でカウンター席を占めていた者に P, Q, R, S, T がいる。一方テーブル席を占めていた者に A, B, C, D, E, F がいる。Fig 2 は、談笑会における参加者の着席である。テーブル席、カウンター席に着席した者は、それぞれ隣接して座る傾向が見て取れる。

## 2. 介入の非対称性

発話を同期させてはいるが、進行中の会話に介入できる者とできない者の区別が生じることがあった。ある発話が他の参加者によって応答されて初めて介入という現象が成立する。応答がなければ、進行中の会話にとってそれは無関連な発言にとどまる。ここで言う介入とは、このような現象を指す。

ある参加者たち同士と同期して、別の参加者たち同士がそれぞれ会話を進展させていることがある。このとき、介入の方向性に非対称性が見られた。仮に二群

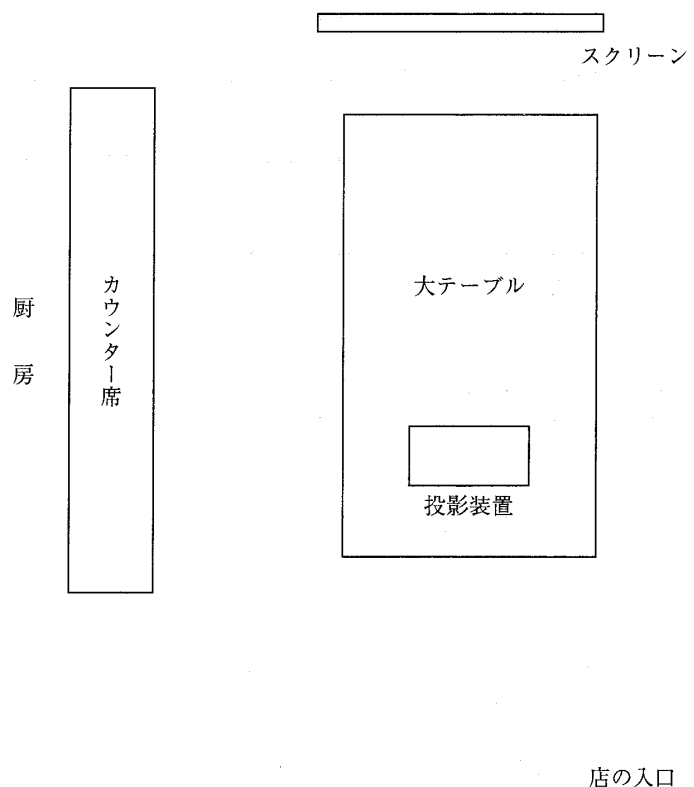
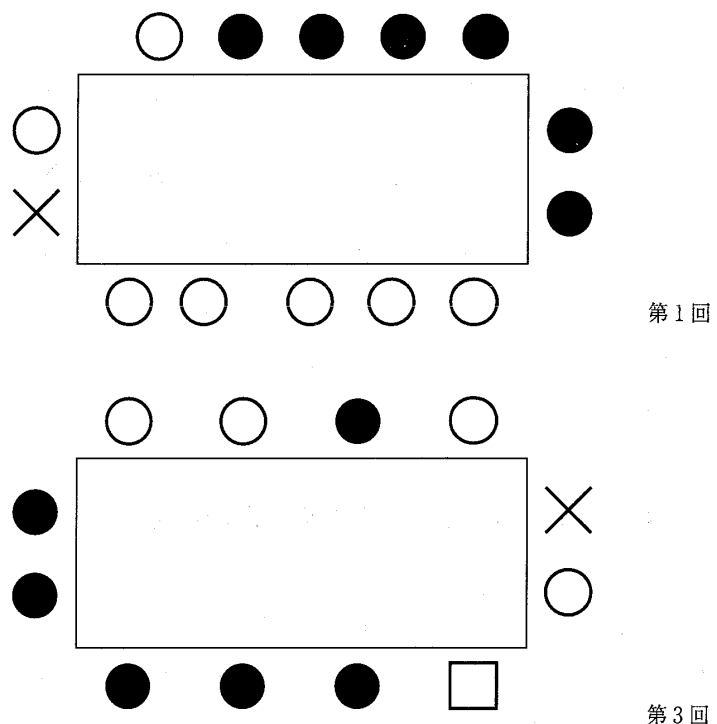


Fig.1 店内レイアウト



●印は上映会時カウンター席、○印は大テーブル席を占めていた者。□印は談笑会のみに参加した者、×印は上映会時の着席場所が確認できなかった者。

Fig.2 談笑会における席の占め方

の参加者たちをX、Yとしておくと、XからYへの介入は見られても、YからXへの介入は見られない、あるいは稀であるような、二つの群X、Yを認めることができたのである。

介入の非対称性とは発言に対する一方的な無関与の表明とも言える。Table 2 に記す事例では、QとSが、DとCによる遂行されている想起に対して、相槌を打ったり、同語反復したり、共鳴したりしているが、応答がなされず、会話の周囲をいわば漂うだけにとどまっている。こののちCとDにEとFが介入し、これらの参加者による会話が進展して行った。そしてQとSはいわば取り残される形となった。Table 3 は、一方の群（B、C、D、E）からもう一方の群（Q、S）への一方的な介入によって開始された会話である。互いに会話を同時進行させていたが、ある時点でBがQとSの会話に介入した。これとは逆に、QとSがB、C、D、Eらの会話に介入して行くことはなかった。

Table 2 介入の非対称性

- 1 D 俺、だってウイング初めて行ったのは／あれだもーん／松永二階ダイブだもん
- 2 S あー
- 3 Q ↑あー
- 4 C ↑あー
- 5 D あれさー、ちょうど／飛んだ時にー
- 6 Q ↑あれもウイングかー
- 7 D そこの下の／あの／ヒナ段／ヒナ段でー／座ってて／上でやってんじゃん／なんか／そ
- 8 んなん見えねーんだよーとかって立ったらさー／なんか変なのね／あれってさ／ヘッド
- 9 ハンターズがどどって
- 10 C (笑)
- 11 S (笑)
- 12 D おっ／…
- 13 S ↑(笑) ヘッドハンターズ
- 14 D あっ、飛びやがったよー
- 15 C (笑)
- 16 (間)
- 17 C んでもあれー、ほら、松永が足から落ちてるでしょう／で、こないだの荒谷のやつ、
- 18 ほらー／頭から突っ込んだでしょう
- 19 F ↑うんうんうん
- 20 Q あーあーあー
- 21 C すげーなー荒谷は／人がやってるとー／いっても／そこまでやるなと思ったんだけど
- 22 ーあの一、／スポーツトゥデイで見たら／荒谷、ダイブの瞬間／バルコニーの手すり
- 23 に足引っかけてました
- 24 D そしたら／単にそれで頭から
- 25 C ↑ただ落ちただけ(笑)／落ちただけ
- 26 F (笑) 落ちただけ
- 27 D 飛んだんじゃないんだ／落ちたんだ
- 28 C ↑落ちたの
- 29 C でも松永とかわんないですよ
- 30 F (笑)

## 3. elicitation sequence の発生

介入された者と介入をした者との間には, Mehan (1979) や Edwards & Mercer (1987) が学校での教師—生徒間に見い出したのと同様の, 特徴的な連鎖が生じることがあった。elicitation sequence と呼ばれるこの会話連鎖は, 発問—応答—評価の三項から構成されている。発問者の要請にそうかたちでの回答が「応答」には期待される。「評価」は「応答」を, ある基準で裁定する発話である。この連鎖では, 会話をコントロールする権力が, 発問・評価者にあることは明らかであろう。Table 3 に示す事例では, B, C, D, E が「発問」「評価」成分を,

Table 3 elicitation sequence

- 1 Q オリプロ  
 2 S オリプロー  
 3 B オリプロ／オリプロ  
 4 Q オリプロ  
 5 B 見に行ってたの?  
 6 Q 見に行っていましたよねー  
 7 S ↑…  
 8 D えー

[中略]

- 9 B どこ見に行ったの?  
 10 Q 結構／行ったよねー  
 11 S 鎌ヶ谷とかー  
 12 Q 千葉行ったことあるよー、私ー  
 13 S 鎌ヶ谷とかー  
 14 Q ↑鎌ヶ谷とかー  
 15 B 鎌ヶ谷  
 16 C ↑すっげー  
 17 C (笑) 鎌ヶ谷まで行った  
 18 D ↑鎌ヶ谷までー?  
 19 X すごい  
 20 C 誰見にー?／誰  
 21 Q 銚子ー  
 22 C 銚子／(笑) 誰見に?  
 23 Q 誰見につてっかねー  
 24 S ↑…  
 25 Q オリプロー  
 26 B ↑誰が好きだったの?  
 27 Q いや…  
 28 E ↑松っちゃん?  
 29 Q (笑) 松っちゃん  
 30 E ↑(笑)  
 31 Q (笑) …  
 32 X 名前出てくるー?  
 33 D ↑な／何やっぱりアングラが好きな訳?  
 34 C アングラって言わないで／インディーって言って  
 35 E ↑あん  
 =36 E アンダーグラウンドが好きなんですか?  
 37 Q 剛が抜けた後にー  
 =38 C ↑やーめい、(笑) その言い方  
 39 E えっ?  
 40 Q 剛が抜けた後にー一生懸命やってたのが／よかったんだよねー  
 41 S ↑ねー  
 42 Q オリプロはー



QとSが「応答」成分を担っている。QとSの会話にBが介入し、Bの周囲に彼と同じ発話成分を担うB、C、D、Eが参集した。介入をされた者、した者をそれぞれ中心に、その周囲に「発問」「評価」成分を担う者たち、および「応答」成分を担う者たちが参集する。このようにして、異質な集団を分割する境界が顕在化する。これは、一種の集団間コミュニケーションである。従来の研究では、異質の集団の存在が前提とされ、その間に生じるコミュニケーションの特質が同定されていたが、本研究のデータでは参加者たちの会話から逆に、異質な集団を分かち境界が顕在化している。

#### 4. 情報共有の拒絶

ある出来事についての想起が進行中、それを途絶させるような、あるいは想起の開始を拒否するような発話がなされることがある。このような情報開示の拒否や躊躇が、共同的に遂行されることがあった (Table 4)。Pの問いは、出来事に関する想起の開始を提案するものであるが、CとEは共同して想起の開始を拒否している。Eによる拒否の提案がなされ (11行)、Cの極めて曖昧な説明 (12行) によってこれが同意される結果となった。この後、間をはさんで別の話題が進行して行った。

Orr (1990) が調査したコピーマシンのサービスマン集団では、情報を共有することが集団への所属感の確認となっていた。複数の参加者が出来事を、ある別の参加者に開示しないことは、同一集団に所属する感覚を後者にもたらさない。逆に前者の間では、情報共有によって所属感がもたらされるだけでなく、自分たちが所属する集団に外部が存在することを確認することで、対照的に内部の存在を明瞭化することができる。

Table 4 情報共有の拒絶

- 1 B いるんですよ、松崎っていうのが／ユニオンで／一応…と両エースと  
 2 いう…で  
 3 E まあ、その昔—／オリエンタル  
 = 4 B 剛のスタイルにあこがれて入ったの  
 5 P あ—／ついて行かなかったんですか  
 = 6 C ↑つ—のは—国際ショースタイル  
 7 P 剛にはついて行かなかったんですか？  
 8 C だってね—／いや、あの／あれはね  
 9 E いやいや  
 10 C ねえ、あれは—／いろいろ—  
 11 E ↑まあ、多くは語らないにしましょうか  
 12 C まあ、剛さんひとり—／抜けなきゃしょうがないって形になっちゃったから—  
 13 E ↑あ—

## 5. 語りの対象

過去のプロレスの試合について語るとき、生観戦した試合とテレビやビデオなどメディアを媒介して観戦したものを区別する特定の参加者たちがいた。これらの者の特徴として、第一に、媒体観戦の試合には「テレビ（ビデオ）で見た」という発言が付加されていた。第二に、各々に対応する語り口が存在していた。生観戦の試合が語られるときは、試合会場での自分の位置、感情、周囲の状況、雰囲気などが優勢に語られた（たとえば Table 2, 7—9 行の D; Table 5 の B, C, D, E）。一方、媒体観戦では、試合の情景のディテールやカメラワーク、編集方法が語られた（たとえば Table 2, 22—23 行の C; Table 6 の C と D）。彼らにとって生観戦と媒体観戦は体験の質を異にしていると思われる。このような語りの対象の区別による参加者の二分は、参加者各自が自薦の年間最高試合を語ることになったときに最も明瞭となった。一方の参加者たちが評価する試合は生観戦されたものが主で、媒体観戦である場合は、先述のような付加的発言によって、生観戦でないことが明示されていた。また、ある参加者は媒体観戦の

Table 5 語りの対象 1

- 1 D G君の前では／なかなか言えないんだけどさー／俺、あの両国の暴動？  
 2 A えっ？  
 3 D 両国の暴動？  
 4 E ええ  
 = 5 D あれ好きなんだよ（笑）、俺  
 6 F （笑）  
 = 7 A ↑おーおーおー  
 8 （間）  
 9 C でもね、それ客だから言えるんですよ／俺、ヘタしたら、あれ、警備員でいたんだもの  
 10 だもの  
 11 D 知らねえよ、そんなもん  
 12 C （笑）なっ／何ちゅうこと言うの  
 13 D いや、でも俺、あの一／ていうかさー  
 14 C ええ  
 15 D なーんていうかな／プロレスの好きなメンバーがさー／あ、まだこんな力あったんだって思ったのね  
 16 なんだって思ったのね  
 17 F あーあー  
 18 E 俺ね、第一回の IWGP の時は恐かったですねー／あれ、蔵前見に行ったんですけどー／あっ／暴動っていうのを初めて見てー／恐かったですよ、あれ  
 19 ぞりゃ恐いだろうねー  
 20 C そりゃ恐いだろうねー  
 21 E うん／初めて見ると  
 22 B （笑）／俺前ーから一列目か二列目でいた  
 23 C 前から（笑）一列目って、それ最前列じゃない  
 24 X うんうんうん、そうそうそう  
 25 D （笑）  
 26 B で、やっぱり／一緒になって言ったもん／帰れコールは言うし、座布団投げたもん  
 27 C でもね、あれはー／あれは当然だよな  
 28 E 投げる座布団がなかったんですよ、俺のそこには  
 29 （間）  
 30 B やったよー／立ち上がって、これもんでー（笑）  
 31 F （笑）  
 32 C 若いもんに負けじと  
 33 B みんないたんだ、同じ空気吸ってたんだ、うれしいな、俺（笑）

試合を「見ていない」試合に分類する発言を行なった。媒体を区別しない参加者が彼らの会話に参入を求められたとき、発話の主としての適性を明示し（たとえば、「生で見たのは少ないんですけど」という前置きを行なう）、語られる体験の質が異なる集団への参入が意識されていた。

Table 6 語りの対象2

- 1 E G 1の長州、藤原？  
 2 X おー  
 3 R えーっ  
 4 B 僕あれよかったんですよ  
 [中略]  
 5 C (笑) いや、あれ見た瞬間、あれっ、こ、こうだっけ？っていうのありましたよ  
 6 D ↑まいっちゃったよ  
 7 D でさテレ朝でーやったじゃん昔の長州と藤原のあの札幌のこれかさー  
 8 C ええ  
 9 X あーあーあー  
 10 D いや これ違う (笑) だろーって思ってさー  
 11 C ↑うん、そ、そう  
 12 C いやー、あの絵はねー、あの絵でねー、あー高田若いねーとか (笑) ねー  
 13 D そこまでひっぱるかー？っと思ってさー

以上5つの実践によって、参加者を二つに区分することが可能となった (Table 7)。それぞれに対して「常連」「新参」という名称を付けたが、これはある参加者が会話の中で用いていた名称を採用したものである。「常連」は明瞭な集団と考えられるが、「新参」は「常連」に属さない参加者という、凝集性の低い、消極的な存在であると思われる。次に述べる集団境界の維持に寄与する実践が「常連」だけに見られることから、そのことは示唆される。

Table 7 集団境界の可視化に寄与する実践のカテゴリーとその様態

実践カテゴリー	「常連」	「新参」
席の占め方	大テーブル	カウンター席
elicitation sequence	「発問」「評価」成分を担う	「応答」成分を担う
介入	あらゆる会話に介入	介入できない会話がある
情報共有	開示しない情報がある	開示されない情報がある
語りの対象	「ライブ」と「メディア」を区別	区別しない

## B. 言語的实践による境界の維持

集団内における実践解釈の多義性やパースペクティヴの個人差、あるいは集団外の者（「新参」）との接触などによって、集団の境界には常に変化の可能性が懐胎している。この見解か

らすれば、集団の安定は変化を最小化しようとする営為、境界維持を志向した営為の結果であることになる。本研究のフィールドにおいても、「常連」の境界を維持しようとする何種類かの実践を見ることができた。

### 1. 見解の齟齬の解消

「常連」の成員間で、想起内容に関する意見の不一致が生じることがある。不一致の調停過程に、境界維持の努力を見ることができる。調停は主として、「両義的語り」とでも言うべき方法によって達成されていた。これは、対立している双方に同意できる部分があるような、曖昧な表現による調停である。具体的には、指示代名詞の曖昧な使用によって指示対象を不明瞭にし、採択すべき見解がどれなのかを曖昧にする。双方の見解が部分的に妥当する意見を提出する、などである。これらの調停方法は、厳密な判断を求めようとするれば、いずれも反論の余地がある。しかし成員たちは、それ以上問い詰める作業を行なわない。Table 8 はその好例で

Table 8 見解の齟齬の解消

- 1 T ムタが悪いんじゃないですかね  
 2 F うん、そう、あれはムタが悪いんだけどね  
 3 C いや、でも、それは／でも  
 4 D ↑いや、違う  
 5 C うん  
 6 D それは違う  
 7 C それは猪木が悪い  
 8 D ↑だからそれは  
 9 D 昔のー／猪木ファンから言わせればー／それは猪木が悪いんや  
 10 C うん  
 11 T あ、そうなんですか  
 12 D それは見せられない猪木が悪いんや  
 13 C だって／相手は／仮にも／グレートムタだよ／昔の猪木はね、どんなボロクソ（笑）  
 14 レスラーでもそれなりに見せるんだから  
 15 F うん  
 16 C えーっていうぐらい／はっきり言ってね、今見たら／なんだこの／クズみたいな選手  
 17 はっていう奴が一杯いたんだから  
 18 F いや、じゃなくて、ムタがねー、なんかすげー遠慮があったよね  
 19 （間）  
 20 C うーん  
 21 （間）  
 22 F いつものムタじゃなかったもん  
 23 A いやだから結局だから／世代的に異なっちゃってるからさー／だから、あのしん  
 24 に、新日のー若い衆って言うのはー／猪木とやるーやり方ってのがさー  
 25 F わかんないんだよね  
 26 A うん  
 27 C うーん  
 28 F うん  
 29 （間）  
 30 A うん、まあ、あと猪木自体も、ま、さっき出てたけども、だからー／相手を光らせ  
 31 るような／ところまでー／今  
 32 C ちょっとねー  
 33 A ↑うん

ある。調停役を果たす23—24行、30—31行のAの発言は、齟齬をきたしていた双方の見解にも賛同するものである。結局どちらの見解が妥当か決着はつけられずに、この話題についての会話は終了している。これらの事例から、見解の齟齬の解消にあたっては、明確に決着がつかないような形になるよう、成員たちが共同していることがわかる。実践の特徴のひとつである共同性がここに見られよう。

## 2. 他者への配慮

Table 5 の1行目にあるように、出来事によってはその想起が開始される時に、「誰誰の前では言えないんだけど」のような但し書きが付加される。プロレスファンは一般に、試合の評価や支持する団体に対して強いこだわりを持っており、軽々に言及されたくない出来事が存在する。結局想起が遂行されることもあるが、これは配慮されるべき当人が不在の場合である。互いに配慮しあう関係であることを提示することで、「常連」の成員は集団の安定をはかっていると思われる。

## 3. 共通の出来事を媒介とした凝集

一つの出来事への自分の関与を提示しあうことによって、その出来事を中核として「常連」が凝集することがある。Table 5 は、この事例でもある。体験の共有によって成員間に仲間意識が確認されている

(33行のB発言)。出来事を利用して凝集性を確認する営為は、先に考察した「情報共有の拒絶」の逆の方法と言えよう。

以上、観察対象から見い出された、集団を可視化する成員の方法を列挙してきた。複数の実践による集団の境界形成と境界の維持は、図式化すればFig 3 のようになる。

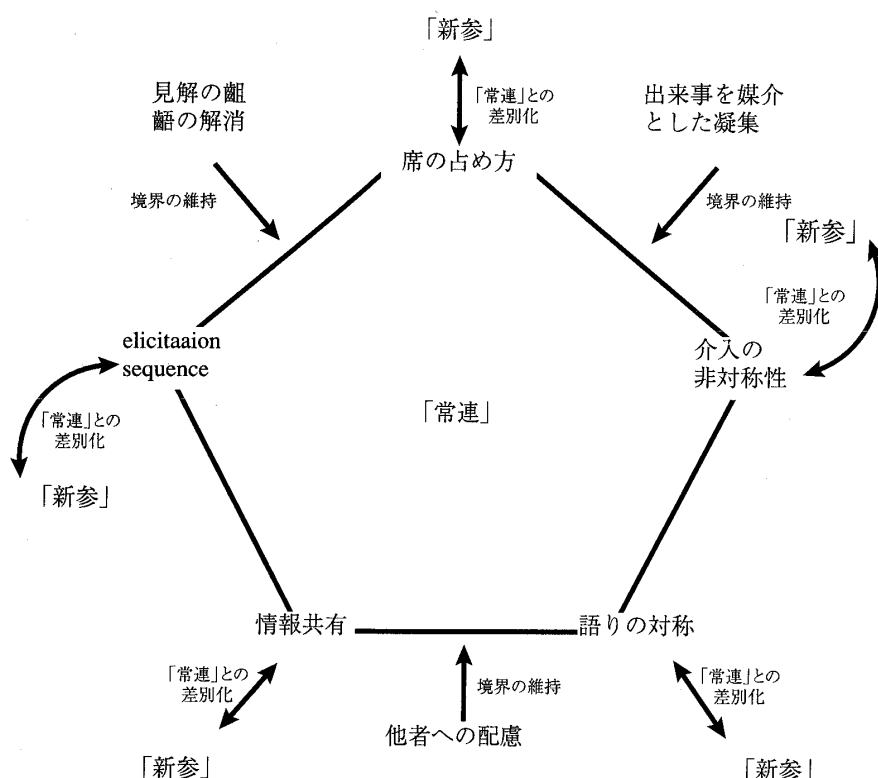


Fig.3 集団を可視化する実践

## ま と め

特定のコミュニケーション、すなわち実践を構成素として、集団の境界が可視化されるプロセスを明らかにしようとする。これが本研究で提唱された集団の同定方法であった。具体的フィールドにおける人々の言動を観察し、この方法を実際に適用することで、特定の者によって形成される集団（「常連」）とそれ以外の部分（「新参」）を区別する実践、および実践によって可視化する集団の境界を、人々の集合体に認めることができた。

コミュニケーションである実践を構成素とすると言いながらも、データ提示の際、あたかも個々の人物が構成素であるかのような記述が用いられていた。A, B, C, D, Eという個人から「常連」が構成されているかのように述べるのは、本研究の立場に矛盾する表現と解されるかもしれない。しかしこの表現には次のような含みがある。ある特定の性格を持つ構成素（境界を形成・維持する実践）の源泉を特定の個人に帰属させることは、ある程度の期間内であれば近似的に許される。この言明は、ある特定の個人はある期間内は「常連」であり続ける、という経験則に則ったものである。ある構成素の産出によってある個人が「常連」とみなされることを、彼が「常連」の成員性を有すると表現するならば、個人の成員性はある程度持続し、一瞬一瞬変化する訳ではないという含意がある。本研究の立場が、コミュニケーションが生起したときのみ成員性が存在するという立場（あたかも、観察したときのみ月が存在すると主張する立場と同類の）ではないことを明確にするため、この含意は重要である。

本研究で描出した集団は、この談笑会で顕在化する唯一の集団ではないだろう。「常連—新参」以外の集団の境界を可視化させるような別の諸実践も存在するかもしれない。たとえば、Table 8では「昔の猪木ファン—今の猪木ファン」という境界を描出することができるかも知れない（二つの見解が齟齬をきたしている最中に発せられた9行のD発言）。しかしそのような境界は維持されることなく、「常連」の境界維持に寄与する実践（「見解の齟齬の解消」）にとって代わられている。本研究で持続的に観察されたのは、結局「常連—新参」の境界のみであった。そしてそのようなデータが、第一回と第三回の談笑会に集中していた。この理由で、本研究が分析の際依拠したデータは、第一回と第三回の談笑会の録音テープとなったのである。ただ「常連—新参」以外の境界の存在が示唆されたことから、集団のあり方は、その物理的外見を越えて多様であるように思われる。多様な集団の混在という現象は、コミュニケーションを構成素とする集団同定法の自然な帰結である。

本研究は、想起を支える社会的集団を同定し、想起という個人的活動と社会性を持つ集合体である集団とのダイナミズムを追及し、想起を一種の社会的・対人的技能として捉え直そうとする試みの一部である。「常連」の想起の特徴とはどんなものか。想起によって彼らはどのような社会的・対人的目的を達成しようとしているのか。「常連」でない者がどのような過程をたどって「常連」へと発達するのか。これらが本研究が今後取り組むべき課題である。本研究

は集団の同定にとどまったが、それ以降の課題は別の発表の機会に譲りたいと思う（最後の課題、「常連」への発達については、補遺で若干考察してある）。本研究の直接的な関心のうちにはないが、本研究が採用した方法は、集団研究一般に対してある程度の意義を持つと思われる。最後にこの点について考察して、本稿を終えたい。

最大の意義は、集団の発達とその過程を追うことができる点にあると思われる。集団を可視化させている実践にはコミュニケーション的性質がある。つまり、絶えまない解釈の循環過程にあるということであり、そこには誤解や新しい意味の発生を可能性として認めることができる。逆に、それらの変化を最小化する営為を見ることが出来る。本研究で見い出された集団境界の維持の実践が、その営為である。実践に注目することで、集団の変化、変化の最小化、変化の源泉となる実践の同定など、集団と個のダイナミズムを扱うことができると思われる。

集団と個のダイナミズムを全面に押し出すことで、集団の諸属性についても新たな見方が切り開かれると思われる。規範、目的、制度など、集団の基盤と考えられたものは、すべて実践の所産あるいは実践それ自体と考えられるようになる。集団それ自体も物理的実体としてではなく、実践によってその境界が可視化するような実践の産物として再概念化されよう。従来の集団研究は、しばしば暗黙裏に集団を固定的なものと考え、それを支える基盤としてやはり固定的な規範や目的などを想定してきたと思われる。このような考えが、集団の本来性からはずれており一時的な有効性にとどまることは、ここまでのデータと議論から理解されると思う。

## 〔補遺〕

集団の成員となるための学習プロセス—「新参」はどのように「常連」となるか—

今回のデータでは十分に言及することはできないが、「常連」に属していない者が「常連」となるプロセスがあるはずだ。この学習プロセスについて考察したい。

学習はある個人に焦点化できるのだろうか。つまり、ある個人の認知や技能の向上が、「新参」から「常連」への変態の内実なのであろうか。個人の認知や技能の恒常化が「常連」であり続けることの内実なのであろうか。本稿では、学習を個人内の変化ではなく、集団内での個人の位置付け（刑部、1998；Lave & Wenger, 1991）として考察してみたい。

その根拠となるのは、次のような事実である。ある個人の言動が「常連」にふさわしいかどうかは、常に精査されている訳ではない。実践のように「常連—新参」を特徴づける言動は観察可能だが、参加者のすべての言動が実践の諸カテゴリーによって分類可能な訳ではない。ある言動が「常連」にふさわしいものかそうでないかの判断、およびその様な判断を下すことの是非は、その言動を聞く聴衆にゆだねられている。つまりある言動は、他の聴衆によって選択的に取り上げられ、評価を受ける。ある言動に「常連」たる機能を見い出すかどうかは、聴衆の側にゆだねられているのである。ある個人の言動が「常連」たる機能を担っていると聴衆が

その言動によって認め、「常連」と位置付けたとき、彼は「常連」となる。これが、本データにおいて、集団内での位置付けとして学習を考える根拠である。

この見解は、個人のなかには何もなく、ただ周囲の評価によって学習という事態が構築されるのだという見解ではない。個人の言動の変化は否定しない。むしろ必要である。ただ個人の変化は学習成立の十分条件ではないと言うだけである。学習を成立させている個人を聴衆が見い出せたときにのみ学習成立という事態が存在するという発想でもない。以上二つの見解は従来の認知主義的見解の裏返しである。すなわち、学習が何か規範様のものを獲得すること（規範に沿った言動がなされている状態になること）だと考え、その規範に照らし合わせることで学習成立の有無が判断される見解の裏返しに過ぎない。無論本稿の立場は、認知主義でもない。学習は規範の獲得ではない。「常連」に見い出された実践を「新参」がまねたところで、彼が「常連」になれる訳ではない。また、「常連」のすべての言動を、ある規範に回収することなどできない。個人の言動が変化しつつ、その変化が聴衆に「常連」と認められたとき、彼は「常連」になる。語を換えれば、学習は成員性の獲得（Lave & Wenger, 1991）である。このように考えてくると、Lave & Wenger (1991) の主張、学習は全人格的であり、アイデンティティの獲得でもあるという主張がただちに首肯される。「常連」はある特殊な技能や規範を指示するものではなく、全人的な成員性であり、他の成員とは異なる、ユニークなアイデンティティなのである。

#### 引用文献

- Brewer, M.B. & Kramer, R.M. 1985 The psychology of intergroup attitudes and behavior. *Annual Review of Psychology*, 36, 219-243.
- Eder, D. 1988 Building cohesion through collaborative narration. *Social Psychology Quarterly*, 51, 225-235.
- Edwards, D. & Mercer, N. 1987 *Common knowledge: The development of understanding in the classroom*. New York: Routledge.
- Edwards, D. & Middleton, D. 1986 Joint remembering: Constructing an account of shared experience through conversational discourse. *Discourse Processes*, 9, 423-459.
- Edwards, D. & Middleton, D. 1987 Conversation and remembering: Bartlett revisited. *Applied Cognitive Psychology*, 1, 77-92.
- Edwards, D. & Middleton, D. 1988 Conversational remembering and family relationships: How children learn to remember. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, 3-25.
- Edwards, D. & Potter, J. 1992 *Discursive psychology*. London: Sage.
- Gruneberg, M.M., Morris, P.E., & Sykes, R.N. (Eds.) 1978 *Practical aspects of memory*. London: Sage.
- Gruneberg, M.M., Morris, P.E., & Sykes, R.N. (Eds.) 1988 *Practical aspects of memory: Current research and issues*. Chichester: Wiley.
- 刑部育子 1998 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析 発達心理学研究, 9, 1-11.
- アルヴァックス, M. 小関藤一郎 (訳) 1989 集合的記憶 行路社. (Halbwachs, M. 1950 *La memoire collective*. Paris: Presses Universitaire de France.)
- ホッグ, M. A. (蘭千壽・磯崎三喜年・内藤哲雄・遠藤由美 (訳) 1995) 1987 社会的アイデンティティと



- 集団凝集性 ターナー, J. C. 社会集団の再発見—自己カテゴリー化理論— 誠信書房, pp. 116—152.
- ホッグ, M. A. (廣田君美・藤澤等 (監訳) 1994) 1992 集団凝集性の社会心理学—魅力から社会的アイデンティティへ— 北大路書房.
- Lave & Wenger 1991 *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press.
- ライター, K. 高山眞知子 (訳) 1987 エスノメソドロジーとは何か 新曜社. (Leiter, K. 1980 *A primer on ethnomethodology*. New York: Oxford University Press.)
- Mehan, H. 1979 *Learning lessons: Social organization in the classroom*. Cambridge: Harvard University Press.
- Middleton, D. & Edwards, D. (Eds.) 1990 *Collective remembering*. London: Sage.
- Neisser, U. (Eds.) 1982 *Memory observed*. Oxford: Freeman.
- Neisser, U. & Winograd, E. (Eds.) 1988 *Remembering reconsidered: Ecological and traditional approaches to the study of memory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Orr, J.E. 1990 *Sharing knowledge, celebrating identity: Community memory in a service culture*. In D. Middleton & D. Edwards (Eds.) *Collective remembering*. London: Sage, pp. 169–189.
- Owen, W.F. 1985 *Metapher analysis of cohesiveness in small discussion groups*. *Small Group Behavior*, 16, 415–424.
- 境 忠宏 1990 集団間コミュニケーション 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一 (編) 社会心理学パースペクティブ 2. 誠信書房, pp. 169–191.
- Sherif, M 1967 *Group conflict and co-operation: Their social psychology*. London: Routledge & Kegan Paul.
- 山田富秋・好井裕明 1991 排除と差別のエスノメソドロジー— [いま—ここ] の権力作用を解説する— 新曜社.

(もり なおひさ 本学人文学部講師 社会認知心理学専攻)